

特集 学び続ける英語教師であるために

# 英語教師としての「指導力」とは？ —これまでの実践から学んだことを通して—

山城 仁

(東京学芸大学附属世田谷中学校)

## 1. 学び続ける原点は部活動で学んだ指導観

私はこれまで十数年間、公立中学校の教師として多くの生徒と関わってきた。新任の頃は、授業の進め方や学級経営、生徒指導、そして部活動のことなどで多くの悩みを抱え、仕事に追われる日々を過ごしていた。上手くいくと考えられる方法を実践してはみるものの、その実際は生徒から「わからない」「できない」という反応ばかり。実践しては悔しさを感じるという毎日であった。

ある日、同じ部活動を担当していた先輩教師が「指導」した生徒は、着実に上達していることに気がついた。先輩教師は「生徒が偶然上手くできることと、生徒が意識的に上手くやり遂げることは全く異なる」ことを話してくれた。これこそが「指導」だと痛感した。つまり、先輩教師の「指導」では、競技力を向上させたり、競技に対する理解を深めさせると同時に、生徒が自ら意思決定し、自信をつけていけるよう意図的に仕向けられていた。その先輩教師の専門的知識の深さ、卓越した指導技術やそれらを生徒に伝え、体得させていく日々の積み重ねは、英語教師にも同じように必要だと考えた。それから私は英語教師としての「指導」のあり方を模索し始めた。

私自身の指導をふり返ると、その指導観は大きく3つの段階に分別できる。以下、その詳細について述べる。

## 2. 授業を真似すること

新任の頃に私がしていたこと(唯一できたこと)は、セミナーや文献で学んだことを真似、授業に取り入れることであった。優れた実践を真似することによって得られるものは多くある。指示の出し方や

活動の取り組ませ方、活動展開などについて、多くを経験してきた教師のアイデアを取り入れることで、授業作りに対する考えは大きく変容する。自分にはない優れたアイデアを取り入れながら構成する授業は、展開に安心感があり、自身の未熟な指導技術を隠すことができる、と思っていた。しかし、英語教師としての信念を自らの外に依拠した「つぎはぎ実践」では、すぐに次なる課題にぶちあたった。「私は一体どのような生徒を育てたいのだろうか。」という疑問が湧き上がってきたのである。おそらく生徒の側からしても、「何をするのか見通せない授業」、「無理なことを要求される授業」という位置付けになっていたのだろう。「わからない」「できない」という生徒が続出した。それでも私は「つぎはぎ実践」を続けた。なぜなら、それしかできなかったからである。

## 3. 生徒とのコミュニケーションから学びを捉える

その後、私は小規模校に異動となり、少人数の生徒と日々の学校生活を送ることとなった。その学校で生徒と関わりが増えていくうちに、私の授業作りに対する指導観は大きく変容した。第一に考えたことは、生徒中心の授業を行うことである。まず、生徒が学んで楽しいと思える授業作りをすることに傾倒した。また、海外の学校の生徒と実際にやりとりし、自分たち自身や住んでいる地域の紹介ビデオを撮影して発信したり、手紙をやり取りして交流した。生徒は大変意欲的に授業に参加し、実際に英語を使用する授業を楽しんでいる様子であった。

それまで、自分のやりたいことを生徒に押し付ける授業をしていた私は、生徒とのコミュニケーションを通して多くのことに気づかされた。それは私が

実践したいことと、生徒が知りたいこと・やってみたいことは同じではないということだ。生徒が本当に知りたいこと・やってみたいことは、少し難しくても、生徒とコミュニケーションがしっかり図れば、チャレンジする心に火を灯すことができるということだ。それらを上手く紡ぐことで生徒の授業に対する好奇心は格段に向上する。授業中の反応や取り組み姿勢、提出物、また日頃の何気ない会話の中に授業作りのヒントが多くある。それらを見逃さず、授業に取り入れようとする姿勢は今でも大切にしている。

#### 4. 実践を俯瞰して捉える

自分自身で考えて実践する授業を重ね、授業作りに対するアイディアが蓄積されてくると、教科書の扱い方を臨機応変に変更したり、授業プリントなどで生徒が楽しく学べそうな活動を選択しながら、授業展開を検討することができるようになる。その一方で、「自分のやっていることが本当に正しいのか」「楽しさだけに終始していないか」という次なる課題を感じるようになった。それ以来、私が取り組んでいるのは、「理論と実践の間に立つ」ことである。つまり、学術的知見と実践を結び、自分が取り組む実践の根拠を明らかにするということである。しかし、日本人中学生を対象とした研究報告はまだ十分に進んでいるとは言えず、調べた学術的知見は目の前の生徒に合わせて十分に検討し直す必要がある。理論と実践の往復は大変根気のいる作業であるが、高校・大学や海外の研究事例から学ぶことは非常に多い。論理的根拠 (rationale) を基に実践のあり方を考え、授業に生かすことは、中学校段階における指導のあり方を必ず進展させると考えている。

また、実践を俯瞰して捉える方法は、優れた実践や自分の実践を言語化することでもある。どのような手順で取り組んでいるか、なぜ(何の目的で)その実践をしているか、などということ自分の言葉で適切に語ることである。そうすれば、次にすべきことが明らかになってくる。さらに、それを周りの教師と共有することで、自分がない、新たな気づきが与えられることも多い。

授業実践には改善すべきポイントが必ず存在す

る。それに自ら目を向け、気づき、改善していくことが授業における指導力を向上させると考える。

#### 5. 英語教師としての「指導力」とは

私はこれまで「指導力」を向上させようとしてきたというよりも、自分の授業を内省し (reflection)、改善しようとしてきた (reflective practice)。それが結果的に「指導力」の向上につながっていると考えている。「教師が成長していくためには、自分が持っている「どう教えるか」についての考えを、自分の教育現場の実際に応じて捉え直し、それを実践し、その結果を観察し内省して、より良い授業を目指すこと」(横溝, 2009)が必要である。生徒が発する「わからない」「できない」というサインに対して、生徒が理解できる手立てが必ずあるはずだと考えている。その手立てを創り出すことこそ、英語教師に求められている力ではないかと感じている。

英語教師にとっての「指導力」は多岐にわたるが、本稿から挙げられるのは以下の点である。

- |            |         |
|------------|---------|
| ・一貫した授業構成力 | ・指導技術力  |
| ・生徒との対話力   | ・ニーズ分析力 |
| ・論理的思考力    | ・思考具現化力 |

ここに挙げた要素は、それぞれが複合的に関わり合いを持つ。それを授業に反映させていながら、これからも生徒が学習を深めていく場面を多く創り出したいと考えている。私の座右の銘は、“Never Too Late”である。授業でも仕事でも、上手いことや失敗することがよくあるのだが、その度に改善方策を検討し、一つ一つ取り返していくことが一番の近道だと思っている。「もう手遅れだ」と決して思わず、生徒のためになる実践を検討し、実行し続けていくことで、結実する時が必ず来ると信じている。そのような思考は自分自身のあり方でもあり、自分自身を常に改善していこうとする姿勢は、英語教師の私にも必要なことだと考えている。

#### 【参考文献】

横溝紳一郎 (2009). 「教師が共に成長する時—協働的課題探究型アクション・リサーチのすすめ」 吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介編 『リフレクティブな英語教育をめざして—教師の語りが拓く授業研究』pp.75-118. ひつじ書房.